

そつたく窯（啐啄窯）命名の由来

啐啄と言う語は禅書の『碧巖録』に「啐啄同時」という言葉で書かれています。その禅書にある本来の意味は「機を得て、両者相応ずる得がたい好機」と解されており、この言葉には世俗的な言葉が引用されており、この言葉についても「鳥が卵を産みまさに孵らんとするとき、ひなが内から殻を啐くき全く同時に、親鳥が外から殻を啄くくと、その機に卵が割れて健全なひなが誕生する」という事を禅の修業の活に取り入れたものと伝えられています。即ち、修行僧が厳しい修行をして、その師である師家から「さとりの機」を与えられることを言うのです。禅書ではそこで啐啄同時の機とも言っております。

この禅語を現代の社会生活の中で使うと、いろいろな事できわめて有意義にその関係を理解する事が出来ます。即ち、師とその弟子、教師とその教え子、上司と部下、さらに親と子、夫と妻等々の関係で、この啐啄同時と言う事が考えられるのではないでしょうか。人間関係だけでなく「物創り」などについても「啐啄同時の機」を捉えるということは極めて大事なことではないでしょうか。焼き物の場合、土と火の関係はその作者が絶好の機会をどのように捉えるかと言う事で出来る作品のいのちを定めるのではないのでしょうか。

私は啐啄窯と言う命名は、このような事を考えていたしました。そして、とくに”そつたく”と平仮名で表現したのは単に読み易いというだけのためでなく、啐啄と言うことばの中に包み込まれている意味を解釈とか説明ではなく、ことばの五韻で端的に伝えたいと考えた結果です。このことは私ひとりの考えではなく、その筋の専門家からも、平仮名の表現の方が馴染み易く、名称としては適当であるといわれています。

平成十五年九月

元人事院総裁・茶道裏千家淡交会理事

内海 倫